

愛知県東海市

松崎遺跡確認調査報告

2005年

愛知県東海市教育委員会

愛知県東海市

まつ さき
松崎遺跡確認調査報告

2005年

愛知県東海市教育委員会



トレンチ3・4 全景（北西より南東を望む）



トレンチ1 製塩土器（5類）堆積層



紡錘車



萬年通宝



U字形鍬鋤先出土状態



トレンチ2 タタキ面



製塩土器

目次

第1章 調査の経緯と遺跡の概要……………	1	(2) 灰釉陶器	
第2章 調査の成果……………	3	(3) 土師器	
第1節 遺構		(4) 製塩土器	
1 タタキ面 (灰層)		(5) その他 (中世陶器、土錘、土製品)	
2 粘土塊、粘土層		2 石製品	
3 貝層		3 その他の遺物	
第2節 遺物……………	4	(金属器、紡錘車、骨角器、自然遺物)	
1 土器		第3章 まとめ……………	10
(1) 須恵器		付表・図版・報告書抄録	

図版目次

図版1 調査区位置図	図版9 土師器実測図
図版2 トレンチ1・2平面・断面図	図版10 須恵器・土師器・土製品・土錘 実測図・拓影図
図版3 トレンチ3・4・5平面図	図版11 製塩土器実測図1
図版4 トレンチ3・4・5断面図	図版12 製塩土器実測図2
図版5 トレンチ6・7・8平面・断面図	図版13 金属器、骨角器・石器実測図
図版6 須恵器実測図1	図版14 遺物写真 (土師器・須恵器等)
図版7 須恵器実測図2	図版15 遺物写真 (骨角器・獣骨類)
図版8 須恵器・灰釉陶器・中世陶器実測図	

挿図・表目次

松崎遺跡位置図……………	2	表1 トレンチ3・4・5層序……………	2
		表2 トレンチ6・7層序……………	2
		付表 貝類組成表……………	12・13

第1章 調査の経緯と遺跡の概要

遺跡の概要 松崎遺跡(貝塚)は、愛知県東海市大田町松崎に所在する。位置は、名古屋鉄道常滑線の太田川駅北方の大田川を越えた線路沿いの、国道247号線で区切られたところにある。遺跡は、知多半島の中でも広い面積をもつ、伊勢湾岸の海岸平地の最北部の標高3~4mの高まり(砂堆)上に立地する。現状は畑地であるが、近世期の新田開発が行われる以前は、海岸線であったところである(挿図)。

これまでに、昭和51年(1976年)7~8月(第1次)、同年12月(第2次)[市教育委員会]、昭和63年度(1988・89年)[県埋蔵文化財センター]の3回にわたり発掘調査が行われている(注)。

遺跡の内容としては、古墳時代後期(5世紀後半)~平安時代(11世紀)にかけて営まれた古代土器製塩遺跡であり、南に接する上浜田遺跡を一連のものとして捉えると、南北約600~700mに渡って遺跡が広がっている。本遺跡は、遺跡の規模、操業期間が長いことからみて、知多半島の中でも中心的な製塩遺跡であり、知多式製塩土器編年の基準資料となっている。

調査の経緯 今回の調査は、遺跡の保存を目的とし、遺跡の残存状況、内容等を確認するための調査である。本遺跡は、知多半島の中で、古い時期の製塩遺跡調査事例であるとともに、編年体系を構成し、学術上重要な遺跡として捉えられている。また、近世期の段階で地先に新田が築造されたことによって、内陸部に位置することになるとともに、集落なども営まれず畑地として存続したことから、非常に良好な状態で残っている。かつては、知多半島の海岸線に多数製塩遺跡が存在したと考えられるが、開発や侵食等でほとんど残っていないのが現状である。これらの理由から、本遺跡の現状保存を図っていく必要があると考え、確認調査を実施した。

今回報告する調査区域は、以前に実施した3回の調査区域の間であり、2~3m幅のトレンチを8本設定した。面積は400m²だが、保存目的の調査であることから、大半は遺物包含層を確認した段階で掘削をやめ、下場で50cm~1m程度の幅のみ地山まで調査を行った。また、遺構等についても検出のみでそのまま埋戻しである。

調査の概要 現地調査は、平成16年(2004年)10月1日~12月7日にかけて東海市教育委員会が主体となって実施した。

10月1日から調査区の設定を行い、10月4日~

12日にかけて、トレンチ5→3→4→1→2の順に、重機を使用して表土除去を行った。

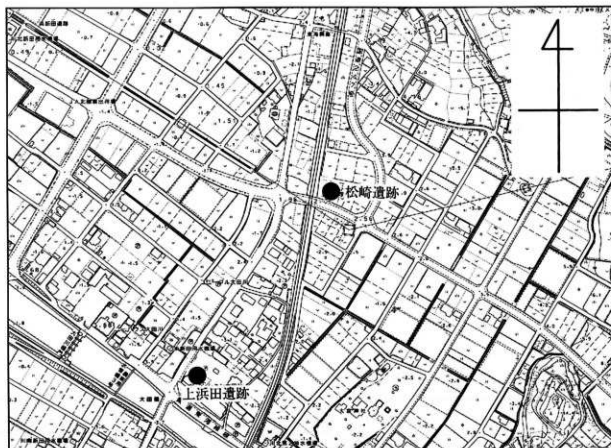
表土の厚さは様々だが、トレンチ1・2は、約20~40cmの耕作土と盛土を、除去した。トレンチ3は、ⅢF1n区~ⅢG3a区西側までが20~40cmの耕作土と盛土を、ⅢG3a区東側~3c区までが1~2mの耕作土、盛土、攪乱土を除去した。トレンチ4は、20~40cmの耕作土、盛土及びⅢF4o区の径2m程の攪乱(井戸跡?)を除去した。トレンチ5は、ⅢF6n区~ⅢF7i区西側までが20~40cmの耕作土、盛土を、ⅢF7i区東側~ⅢG8d区までが1~2mの耕作土、盛土、攪乱土を除去した。

手掘りによる下層の調査も10月7日から表土掘削が終わるまで順次開始した。いずれのトレンチも遺物包含層を検出した段階で一旦掘削を止め、トレンチ1は、調査区西側、トレンチ2・5は調査区南側、トレンチ3は調査区北側、トレンチ4は調査区東側に、それぞれ幅50cm~1m程度のサブトレンチを設定し、さらに下層の調査を行った。トレンチ3・4・5は、11月16日に調査が終了、11月22日に埋戻しを完了し、トレンチ1・2は、11月24日に調査が終了、11月30日に埋戻しを完了した。

トレンチ8については、11月10日に重機を使用して表土除去を行ったが、70~80cmの耕作土、盛土を除去した下に20~50cmの青灰色粘土が堆積しており、現況の畑地以前に水田として利用されていた床土と考えられ、これも除去した。さらに下層の20~40cmの無遺物層を除去した段階で、湧水面に達し、遺物包含層が確認できなかったため、手掘り調査は行わなかった。

トレンチ6・7は11月22日に重機を使用して表土除去を行い、20~40cmの耕作土、盛土を除去した。トレンチ6の南側は、1976年12月に実施した調査区(Ⅶ区)にかかるため、調査時の埋土も除去した。11月24日から手掘りによる下層の調査を実施した。トレンチ6・7についても、遺物包含層を検出した段階で一旦掘削を止め、トレンチ6は調査区西側、トレンチ7は調査区北側に50cm程度のサブトレンチ設定し、さらに下層の調査を行った。

12月1日には調査を終了、12月7日にトレンチ6・7・8の埋戻しを完了し、発掘調査を終了した。
注 東海市教育委員会1977年「松崎貝塚」、東海市教育委員会1984年「松崎貝塚第2次発掘調査報告」、愛知県埋蔵文化財センター1991年「松崎遺跡」



松崎遺跡位置図 (1:5000)

表1 トレンチ3・4・5層序 (断面図は図版4)

- ①表土層②黒褐色砂層 (4類含) ③'遺物少④黒褐色砂層 (4類,炭化物片含む) ⑤黒褐色砂層 (4類,炭化物片含む)
 ⑥混貝暗黄褐色砂層⑦黄褐色砂層 (黒色砂ブロック混入) ⑧混貝暗茶褐色砂層⑨黄褐色砂層 (無遺物)
 ⑩黄褐色砂層 (茶色味おびる) ⑪暗黄褐色砂層⑫黒色砂層 (1類含) ⑬灰黄色粘土層⑭炭化物層⑮貝層
 ⑯混貝茶褐色砂層 (4類含) ⑰'遺物少⑱茶褐色砂層 (炭化物混入) ⑲赤褐色砂層 (焼痕) ⑳茶褐色砂層
 ㉑暗灰黄褐色砂層㉒'暗め㉓黒褐色砂層 (茶色味おびる) ㉔灰色砂質土層 (水田) ㉕暗褐色砂層㉖混貝黒褐色砂層
 ㉗'貝の混入少㉘褐色砂層㉙'黒味おびる㉚灰褐色粘土層㉛'砂質㉜灰褐色砂質土層㉝暗褐色砂層 (粘土ブロック含)
 ㉞暗褐色砂層 (茶色味おびる・1類出土) ㉟'遺物少㊱'赤味おびる (かまど?) ㊲灰褐色砂層㊳暗灰色砂層
 ㊴'粘土ブロック含㊵黒色砂層㊶貝層 (黒色砂混入・3類出土) ㊷明褐色砂層 (1類含) ㊸暗灰褐色砂層 (住居埋土?)
 ㊹灰褐色粘土層 (かまど?) ㊺流土?

表2 トレンチ6・7層序 (断面図は図版5)

- ①表土層②混貝暗褐色砂層③'粘土ブロック含④暗褐色砂層⑤灰黄色粘土層⑥'貝混入⑦混貝暗灰黄色砂層
 (粘土ブロック含) ⑧混貝暗灰黄色砂層⑨混貝灰褐色砂層⑩灰黄色砂層⑪混貝茶褐色砂層⑫暗灰黄色砂層
 (1類,炭化物少量含) ⑬'黒色味おびる⑭黒色砂 (1類,炭化物含) ⑮暗黄褐色砂層⑯黄褐色砂層 (茶色味おびる)
 ⑰'粘土ブロック含⑱暗灰色砂層 (炭化物含) ⑲混貝暗灰黄色粘土層⑳混貝灰色砂層㉑混貝茶褐色砂質土層
 ㉒混貝黒褐色砂層㉓混貝灰褐色砂質土層㉔黒褐色砂質土層㉕'貝混入㉖暗灰褐色砂層㉗'粘土ブロック混入
 ㉘黒褐色砂層㉙灰黒色砂層㉚暗灰色砂層 (粘土ブロック含) ㉛暗灰黄色砂層㉜暗褐色砂層 (貝点在)
 ㉝灰褐色砂層 (炭化物点在) ㉞灰黄色砂層 (炭化物点在) ㉟'粘土ブロック含㊱暗灰色粘質砂層 (4類含む)
 ㊲暗灰黄色砂層 (炭化物点在) ㊳'粘土ブロック含

第2章 調査の成果

第1節 遺構

今回の調査は、保存目的の確認調査で、面的な調査を行っていないこともあり、明確に確認できた遺構はほとんどなかった。遺構の一部と考えられるものをいくつか検出したが、全体がつかめないうえ、大半は検出のみでそのまま埋戻した。

1 灰層（タタキ面）（図版2・巻頭カラー）

トレンチ2のⅡF17n区で検出しており、灰や炭化物を含んだ、厚さ数mmの薄層が幾層も堆積した10cm程の硬質な灰層（面）である。市教育委員会が実施した第1次調査のⅣ区北部地区でも同様の灰層（面）が確認されており、その広がりとして捉えられる。第1次調査でも報告されているが（注1）、この灰層の特徴は、瀬戸内海の喜兵衛島における製塩遺跡で明らかにされた「タタキ面」（注2）と考えられる。この面の形成要因は、煎熬過程で生じる苦汁や灰が周囲の砂や土とまざり合い、作業過程において踏み固められてつくられていったもの（注2）とみられる。今回検出した「タタキ面」は、この範囲の北端にあたりと考えられる。本遺構の北側に接するトレンチ1では、同じ標高で知多式製塩土器5類の小破片、炭化物等が多量に混入する層（製塩土器廃棄層）が広がっており、知多式製塩土器5類の段階の製塩に伴う遺構である。

「タタキ面」、製塩土器廃棄層からは、時期が判別できる容器類は出土していないが、製塩土器廃棄層の直下の層から黒熊90号窯期（9世紀後半）の灰釉陶器が出土しており（図版8-67・71・73）、同時期がそれ以降に形成された遺構と考えられる。

2 粘土塊、粘土層（図版3・5）

今回の調査区域の中ではトレンチ3～7で灰黄色または灰褐色の粘土が塊となっている遺構と、面的に広がる層（面）として捉えられる遺構を検出した。

トレンチ3は、ⅢF2p区で、灰黄色粘土塊を検出しており（範囲が狭いため図上には不記）、東側に接して数cmの炭化物層が堆積する。住居跡に伴うカマドとも考えられるが、詳細は不明である。本遺構に伴う遺物としては、明確に捉えられないが、周辺の黒褐色砂（製塩土器4類を含む）からは、折戸10号窯期の須恵器が出土している（図版7-49・55）。

ⅢF2s区では、地山と考えられる黄褐色砂直上で東西約70cm（南北、厚さは不明）の灰黄色粘土塊を検出している。周辺で炭化物等を含む層はなく、遺構に伴う遺物も出土していないため詳細は不明であ

る。

トレンチ4は、ⅢF4o区で径1m程の範囲に分布する、土師器破片を多数含む灰黄色粘土塊を検出している。調査時は一連の塊と捉えていたが、西側と東側では標高に30cmの差がある（西側が高い）ことから、別遺構となる可能性がある。住居跡に伴うカマドとも考えられるが、住居の範囲等は確認できなかったため不明である。粘土塊に伴う遺物としては、折戸10号窯期の須恵器柄杓蓋、甌（図版7・8-48・50・51・61）、井ヶ谷78号窯期の無台碗（図版8-63）、土師器甕（図版9-88・89・94・96・97）が出土している。土師器は8世紀前半～9世紀前半の時期のものがあり、出土遺物からも、一つの遺構としては捉えられない可能性がある。

トレンチ5は、ⅢF6・7n・7o・7p区にかけて面的に広がりがある、厚さ10～40cm程の灰褐色粘土層を検出している。この粘土層の直上層（褐色砂層）で土鎌が約30点（図版10-110～112・122・123・126・127）と黒熊90号窯期の灰釉陶器Ⅲ（図版8-70）がまとまって出土しており、この時期の生活面として捉えられる。

ⅢF7q・7r区では、地山（基盤面）と考えられる黄褐色砂直上で東西約2m（南北は不明）、厚さ20cmほどの灰褐色粘土塊を検出している。粘土塊の東側1mの場所で縦穴の立ち上がりを検出しており、縦穴住居跡に伴うカマドの可能性が高い。遺構に伴う遺物はほとんどないため、詳細な時期は不明だが、製塩土器4類が住居跡埋土と考えられる、暗灰褐色砂層から出土している。

トレンチ6は、ⅢF9l・m区南側から10l・m区にかけて、径50cm程の灰黄色粘土塊が点在する。住居跡に伴うカマドとも考えられるが詳細は不明である。粘土塊に直接伴う遺物は少ないが、ⅢF10区南側の粘土塊に貼りつくように東山44号窯期の須恵器坏身（ほぼ完形、図版6-7）が出土している。

ⅢF8l・mには、面的に広がる厚さ10～30cm程の灰黄色粘土層を検出している。北側に広がる様相を示しており、生活面として捉えられる可能性がある。

トレンチ7は、ⅢF8・9-m・n区で東西2m程の幅で南北に延びる、厚さ30cmほどの灰黄色粘土層が広がっている。標高からみて、トレンチ5のⅢF6・7n・7o・7p区に広がる灰褐色粘土層のつながりとも考えられるが詳細は不明である。

3 貝層（図版2～5・付表）

トレンチ2～7の各トレンチで、貝層または混貝層を検出している。

トレンチ2は、ⅡF17o・p・q・r区に広がる貝層を検出しており、厚さ10～20cmの純貝層が散在し、その間に混貝層が広がる。

トレンチ3は、ⅢF1・2-n・o区とⅢF2pに混貝層が広がる。ⅢF2q・r区にはハマグリを主体とした純貝層が広がっており、最上部でブロックサンプリングをおこなった以外は掘削せずに残した。

トレンチ4は、ⅢF2・3・4o区に広がる貝層・混貝層を検出したが、一部調査した以外は掘削せずに残した。

トレンチ5は、ⅢF7p・q区で厚さ20cm程の貝層・混貝層を検出している。

トレンチ6は、純貝層は検出しなかったが、全体的に混貝層が広がっている。

貝層のブロックサンプリング(注3)は、トレンチ2で4箇所(A～D)、トレンチ3で3箇所(E～G)、トレンチ4で2箇所(H・I)、トレンチ5で1箇所(J)、トレンチ6で1箇所(K)行った。各サンプリングの貝類組成は付表のとおりである。

注

- 1 東海市教育委員会1977年「松崎貝塚」
- 2 近藤義郎1958年「師楽式遺跡における古代塩生産の立証」『歴史学研究』第233号
- 3 近藤義郎 1984「土器製罐の研究」青木書店に再録
- 3 貝層のサンプリングは幅20cm×奥行20cm×厚さ10cmを1ブロックとしたが、トレンチ4のサンプルHのみ奥行10cmである。

第2節 遺物

今回の調査で出土した遺物としては、須恵器、灰釉陶器、土師器、製塩土器、土製品、石製品、金属器、骨角器があり、自然遺物としては、貝類、獣骨類がある。明確に検出できた遺構がないこともあり、遺構に伴う遺物はほとんどなく、大半は遺物包含層中からの出土である。遺構に伴うと考えられる遺物については、個別に記載する。

なお、須恵器・灰釉陶器の編年等については、城ヶ谷和広氏(愛知県立豊田南高等学校)に、同じく土師器については、永井宏幸氏(愛知県埋蔵文化財センター)に、また石製品の石材および獣骨類の同定については、堀木真実子氏(愛知県埋蔵文化財センター)に御教示をいただいた。

1 土器

(1) 須恵器(図版6～8・10)

須恵器のほとんどは、トレンチ3～7で出土しており、トレンチ1・2からの出土は少ない。

時期的にみると、5世紀代から9世紀代まで6世紀代を除き、ほぼ空白の時期がなく出土している。特に今回の調査では、7世紀前半代(東山44号・東山50号窯期)と8世紀後半代(折戸10号窯期)の出土が多い。以下、時期ごとに概観する。

5世紀代(図版6-1～3)

5世紀代に位置づけられるものとしては、坏身(1・2)、高坏(3)があり、1・3はトレンチ5、2はトレンチ3から出土している。

1は、口縁端部を欠く。体部は回転ヘラ削り調整で、口縁部は内傾する。口径約13cmと大形であり、高坏の可能性もある。焼成・胎土が他の須恵器と比較して異質であり、猿投窯産ではない可能性が高い。2は、口径10.2cm、体部が回転ヘラ削りで、口縁部は内傾気味に立ち上がり、端面は内側に傾斜する。3は坏部上半を欠くが、残存部は、回転ヘラ削りである。脚部は外湾しながら開き、下端部が突帯様に肥厚する。

帰属時期については、1が陶呂窯のTK216～TK208期頃(5世紀中葉)、2・3が東山11号窯期(5世紀後半)と考えられる。

7世紀代(図版6・7・8・10-4～37・60・102～105)

7世紀代に位置づけられるものとしては、坏蓋(4～6・13～18・31)坏身(7～9・19～24)、高坏(11・12・25・26・32～34)、広口壺(10・27・28)、はそう(29)、有台坏(30)、提瓶(35)、甕(36・102・103・105)、甌(60・104)、土師器碗(37)がある。

出土状況は、30がトレンチ2、12・13・18・19・31・34・36・60がトレンチ3、14・20・21・27がトレンチ4、4～6・25・28・29・32・35がトレンチ5、7・10・15～17・22・23・26・33がトレンチ6、8・9・11・24・37がトレンチ7からの出土である。

坏身7については、トレンチ6のⅢF10I区南側の粘土塊に貼りつくように出土している。

提瓶35については、トレンチ5のⅢF7q区、混貝黒褐色砂層から鉄製U字形鋤鍬先(図版13-229)、土師器甕(図版9-85)、知多式製塩土器3類とともにまともな状態で出土している。

坏蓋 4～6は、口径12～13cmで、天井部の約1/2が回転ヘラ削り、口縁部は若干外傾する。口縁端部は4が内面に窪みをもつものに対して、5・6は丸くおさまる。器高は、5が3.6cm、6が3.8cm、4が4.9

cmで、4が若干高い。13～18は、口径9.5cm～11.5cmで、器高は3.5cm前後である。天井部の最上部のみ回転ヘラ削りのものが多い。4～6に比較してI線部と天井部との境の段が不明瞭である。31は、口径10.8cm、外面の約1/2が回転ヘラ削りで、内面にかえりをもつ。

坏身 底部が丸いもの(7・21・22・24)と中央に面をもつもの(8・20)がある。いずれも底部付近のみ回転ヘラ削り調整である。口径は9cm～11cm前後で、器高は4cm前後である。7・8は他と比較して若干器高が高い。

高坏 いずれも無蓋の高坏で、坏部の口縁と底部との間の段が明瞭で、口縁部内面に段があるもの(11・25・26)と不明瞭で、段のないもの(33)がある。11・25は口縁部が丸い底部からまっすぐに開き、26は内湾気味に開く。11・12は脚部に2方向ないし3方向の透かしをもつが、32～34は透かしがない。34は、脚部中央に2本の沈線を施す。

広口壺 胴部最大径が17cmほどで大形のもの(10)と11cm前後で小形のもの(27・28)がある。10は2条、27は1条の沈線を施す。

はそう(29)は口径10cmで、口縁部は外湾気味に開く。

有台坏(30)は、ほぼ完形で口径13.8cm、器高4.8cm、底径10.2cm、底部は回転ヘラ削りである。

提瓶(35)は、口縁部を欠く以外は、ほぼ完形である。緩やかに外反する口縁部に2条の沈線を施す。底部には、焼成時に附着したと思われる砂礫塊が付く。

甕 36は口径20cmで、1/6ほど残存する。胴部外面にタタキを施す。102・103・105は口縁部破片で、102は2条の沈線の上部にヘラ状工具による刺突を施す。103は2段の櫛描波状文の間に2条の沈線を施す。105は2条の沈線の下に櫛状工具による刺突を施す。

甗 60は、底部以外は、ほぼ完形である。胴部に1条の沈線を施し、ほぼこれを境に上部がタタキ、下部がヘラ削りを施す。底部はほとんど残っていないので透かし孔は不明である。104は、口縁部破片で、外面にタタキを施す。

土師器碗(37)は口径13cmで、外面にはヘラ磨きを施すが、下部に指頭痕が残る。内面は斜線列のヘラ描暗文を施す。

各遺物の帰属時期については、5～9・11・12が東山44号窯期(7世紀前半)、13～29・35・60・102～105が東山50号窯期(7世紀中葉)、10・30～34・

36・37が岩崎17号窯期(7世紀後半)に位置づけられよう。

8世紀代(図版7・8-38～59・61)

8世紀代に位置づけられるものとしては、有台坏(38)、はそう(39)、無台坏(40～45)、無台碗(46・47)、摘み蓋(48～51)、有台盤(52・53)、有台坏(54)鉢(55～57)、壺(58)、陶片(59)、甗(61)がある。

出土状況は、39がトレンチ2、40・49・55がトレンチ3、38・41～46・48・50～52・54・58・59・61がトレンチ4、56がトレンチ5、53・57がトレンチ6、47がトレンチ7からの出土である。

摘み蓋49、鉢55については、トレンチ3ⅢF2p区の灰黄色粘土塊の周辺から出土している。

摘み蓋48・50・51、甗61についてはトレンチ4ⅢF4o区のカマドとも考えられる、土師器破片を多数含む灰黄色粘土塊の周辺からまとめて出土している。

有台坏(38)は、口径15.5cm、器高3.8cm、底径12cmで、丸く屈折した腰部の内側に高台が付く。底部は回転ヘラ削りである。

はそう(39)は、口縁部、注ぎ口を欠く。底部は糸きりした後、低い高台を付ける。

無台坏 底部と体部が屈曲するもの(40～42)と底部と体部の間にヘラ削りを施すことにより段を形成するもの(43～45)がある。口径は12cm前後、器高は4cm前後である。底部は、40が糸きり後に外側のみヘラ削りを施し、43～45はヘラ削りである。

無台碗 46は口径11cm、器高3.7cm、底径5cmで、底部は糸きり未調整である。47は、口径12cm、器高3.4cm、底径5.6cmで、底部はヘラ削りである。

摘み蓋 口径は14cm前後で、体部上半がヘラ削りである。49～51の頂部には擬宝珠形の摘みがつが、49・50は扁平である。51の頂部内面は線刻を施す。

有台盤(52・53)は、いずれも底部から斜め上方へのびる体部をもち、口縁部は2度折り返され、端部は水平方向へ引き出される。52は、口径17cm、器高3.6cm。53は完形品で、口径13.2cm、器高2cm前後、底部はヘラ削りである。

有台坏(54)は、口径16cmで底部を欠くが、高台が付くものと思われる。

鉢は、肩部を形成し、直立する口縁部をもつもの(55・56)と体部から口縁部へ直線的に立ち上がるもの(57)がある。口径は16cm前後である。55は口縁部に窪みがある。

壺(58)は、肩部を形成し、短く直立する口縁をもつ。口径は7cmである。

陶匜(59)は、底径7.5cmで、底部内面には擦られた痕跡がある。

甗(61)は、底部付近の一部のみだが、残存する底部の窓の一部から想定すると、四圍に楕円形の窓を配す4窓もしくは5窓のものと考えられる。

各遺物の帰属時期については、38が高蔵寺2号窯期(8世紀初頭)、39が鳴海32号窯期、40~59・61が折戸10号窯期(8世紀後半)に位置づけられよう。

9世紀代(図版8-62~64・66)

9世紀代に位置づけられるものとしては、無台碗(62・63)、有台盤(64)、皿(66)がある。いずれもトレンチ4からの出土である。

無台碗63についてはトレンチ4ⅢF4o区のカマドとも考えられる、土器器臺破片を多数含む灰黄色粘土塊の周辺からまとまって出土している。

無台碗62は口径12.7cm、63は14cmである。器高はいずれも4cm前後、底部は回転糸切り未調整である。63はほぼ完形で、内面中心に円形の沈線様の窪みがある。

有台盤64は口径20cm、器高3.3cmで、底部を欠く。底部から斜め上方へのびる体部をもち、口縁部の折り返しはない。高台の接地面は外側である。

皿66は口径17cm、器高2.7cm、底部は回転ヘラ削りである。高台は付かず、蓋になる可能性もある。灰釉陶器を模倣したものと考えられる。

帰属時期については、62~64が井ヶ谷78号窯期(9世紀初頭)、66が黒笹14号窯期(9世紀前半)に位置づけられよう。

器種・時期不明の須恵器(図版10-100・101)

破片資料のため、器種・時期等が不明だが、外面に縄帯文のタタキを施し、内面に同心円のあて具痕がある胴部破片が2点出土している。韓式系の須恵器と思われるが詳細は不明である。

(2) 灰釉陶器(図版8)

灰釉陶器は、トレンチ1~7いずれからも出土しているが、全体的に須恵器と比較して遺物量は少ない。トレンチ1で製塩土器5類の廃棄層が広がっていたこともあり、トレンチ1・2からの出土が比較的多い。皿70については、トレンチ5のⅢF6・7n・7o・7p区的生活面として捉えられる灰褐色粘土層直上層(褐色砂層)で十鍾約30点(図版10-110~112・122・123・126・127)に伴って出土している。

今回出土した灰釉陶器は時期的にみると、9世紀後半から10世紀前半のものが大半である。以下器種ごとに概観する。

碗(65・67~69・77)

65・67はトレンチ1、68はトレンチ2、77はトレンチ3、69はトレンチ4から出土している。

65は、底部が回転ヘラ削りで、断面方形の角高台がつく。高台の接地面は内側である。体部内面に灰釉を施す。67・69は口径14cm、68は11cmで、いずれも底部に三日月形の高台がつく。底部は68・69が回転ヘラ削りで、67が回転糸切り後、回転ヘラ削りを施すが、中央に糸切り痕が残る。67・69は体部内外面、68は体部外面と内面全体に刷毛塗りによる灰釉を施すが67は発色していない。77は底部残存部が回転ヘラ削りで、小さく内湾する高台が付く。体上部内外面に漬け掛けによる灰釉を施す。

帰属時期については、65が井ヶ谷78号窯期(9世紀初頭)、67~69が黒笹90号窯期(9世紀後半)、77が折戸53号窯期(10世紀前半)に位置づけられよう。

皿(70~72・76・78~80)

71はトレンチ1、78はトレンチ2、72はトレンチ3、76・80はトレンチ5、79はトレンチ7から出土している。

70・71は、口径が約15cm、72は13cmで、いずれも三日月形の高台がつく。底部は70が回転ヘラ削りの後外側のみ回転ナデ調整を施しており、71が回転糸切り後、全体にナデ調整を施し、72が回転糸切り後、外側のみ回転ナデ調整を施す。70・71は内面全体、72は体部内面に灰釉を施す。76は口径14cm、80は12cmで、いずれも口縁部内外面に漬け掛けによる灰釉を施す。78は段皿で、口径18.6cm、器高2cmである。底部は回転ヘラ削りで、中央部を除く内面に灰釉を施す。80の底部は回転糸切り後に外側のみ回転ヘラ削りを施す。79は体部内面に灰釉を施し、底部が回転ヘラ削りである。

帰属時期については、70~72が黒笹90号窯期(9世紀後半)、76・78~80が折戸53号窯期(10世紀前半)に位置づけられよう。

平瓶・蓋・小瓶(73~75)

73は底部付近のみ残存しており、壺の可能性もある。底部は指頭痕が残る。底部外面以外すべてに灰釉を施す。74は口径18cmで、頂部を欠くが蓋みが付くものである。天井部外面は回転ヘラ削りで、灰釉を施す。75は肩部に灰釉を施す。

帰属時期については、いずれも黒笹90号窯期(9世紀後半)に位置づけられよう。

(3) 土師器 (図版9・10)

今回の調査で出土した土師器の大半は甕で、以外は図示できるものが碗1点のみである。碗については前項の須恵器の中で触れたのでここでは省略する。

出土状況は、91・97がトレンチ2、83・84・99がトレンチ3、87・89・92・93・95・96がトレンチ4、85・94がトレンチ5、86・98がトレンチ6、90・107・108がトレンチ7からの出土である。

85は、トレンチ5のⅢF7q区、混貝黒褐色砂層から須恵器提瓶(図版7-35)、鉄製U字形鋸齒先(図版13-229)、知多式製埴土器3類とともにまとまって出土している。87・88・93・95・96は、トレンチ4ⅢF4o区のカマドとも考えられる、灰黄色粘土塊の周辺から須恵器摘み蓋(図版7-48・50・51)、甕(図版8-61)とともにまとまって出土している。

今回の調査で出土した土師器甕は、長胴甕がほとんどで、以外は小形の甕(鉢?)である。

83は、口径14cm、84-86は約20cmで、いずれも口縁端部の断面が三角形の摘み上げ状になり、外面胴部に細かい刷毛目を施す。

87・90は口径21cm、88は17.5cm、89は14cmである。87の口縁部断面は丸くなり、外面に刷毛状工具による刺突を施す。88-90の口縁部断面は三角形を呈するが、摘み上げ状にはならない。88-90の胴部外面には細かい刷毛目を施すが、87は荒い刷毛目を施す。

91は底部を欠くが、ほぼ完形に復元できる。口径25cm、器高41cm前後で、口縁部は肥厚し「く」の字状になる。胴部外面、頸部内面には荒い刷毛目を施し、内面には輪積痕が残る。92は底部付近のみだが、外面に荒い刷毛目を施す。内面の底部と胴部の境は肥厚し、輪積痕が残る。93は口径16cmで、口縁部は肥厚し、内面頸部に明瞭な段がある。胴部外面、口縁部内面に荒い刷毛目を施す。95は口径23cm、96は20cmで、いずれも口縁部が肥厚し、「く」の字状になるが、91・93と比較すると口縁部が長くなる。胴部外面は荒い刷毛目を施し、96は頸部にヘラ削りを施す。97は口径13cmと小形だが、口縁部は肥厚し「く」の字状になる。胴部外面と口縁部内面に刷毛目を施す。94・98・99・107・108は口径10cmほどの小形の甕ないし鉢である。94は口縁部が短く直立し、底部は丸底になる。内外面とも刷毛目を施すが、内面は丁寧に調整しているのに対して外面は部分的で口縁部付近は輪積痕が残る。98は底部が丸底で、内外面ともナデ調整だが外面口縁部付近に指痕が残る。99は底部付近のみで、平底になる。

全体的に薄手のつくりで、内外面ともナデ調整である。107・108は破片資料だが、口縁部はやや受口状を呈し、口縁部と胴部のつなぎ部分が肥厚する。内外面ともナデ調整だが、内面には輪積痕が残る。94・98・99・107・108は胎土に砂粒を多く含む。

帰属時期については、83-86が7世紀代、87-90が8世紀前半代、91-94が8世紀後半代、95-97が9世紀前半代に位置づけられよう。

(4) 製埴土器 (図版11・12)

・知多式0類類似(134-136)

東海市大田町の上浜田遺跡で確認した知多式製埴土器0(ゼロ)類に類似する古い形態の筒型脚台が2点出土している。東海市大田町上浜田(かみはまだ)遺跡(注1)で確認した0類と比較すると、脚台の底径は変わらないが、脚台の高さ(脚台下端から器体内底面までの高さ)がやや小さいものである。このほか、134は脚台が逆V字型に広がり(0類は逆U字形)、0類祖形と仮称しているタイプである。

・知多式1類・2類(137-187)

器に筒形脚台が付くタイプ。トレンチ5西端(ⅢF6n区)の下層⑩黒色砂層(黒褐色砂)から小形のもの(139-149)がまとまって出土している。脚台の法量は、器体と接する脚の径が2.3cm-3.4cm(平均2.7cm)、底径が2.8cm-4.2cm(平均3.1cm)、器体内底面から脚下端までの高さか5.0cm-6.5cm(平均5.9cm)である。137・138は口縁部で、外面には成形時の粘土紐の跡が残されたままであるが、内面は丁寧にヘラ削りとナデ調整が加えられて平滑に仕上げられている。149は、筒部内側上部の形状がやや狭い。150-152は、脚台を1類の筒形に作り出したあと、下端を尖り味味に閉じ合わせた知多式2類で、1類と混在して出土しており、この2類も、1類の筒形脚と同じ時期に作られている。

139・140は、後述するトレンチ7から出土したもので、脚台筒部の上部が柱状に伸びるタイプで、古い様相を帯びるものとしてとらえられる。

これらは1類のうちで、脚台下端面を主に平坦に作り出すA類の脚台の高さの低い1A1類(注2)に属するものである。

トレンチ2の東部(ⅡF17r・18s)の下層から1類がまとまって出土している。ⅡF17rの⑩黒褐色砂層と18sの⑩黒色砂層(黒褐色砂)出土遺物は、脚台の大きさが若干異なるまともりをもっている。ⅡF17r出土脚台(156-159)の法量は、器体と接する脚の径が2.5cm-3.7cm(平均2.8cm)、底径が

3.1cm～3.6cm (平均3.3cm)、器体内底面から脚下端までの高さが5.8cm～8.7cm (平均7.0cm)である。ⅡF18s出土脚台(160～168)の量法は、器体と接する脚の径が2.2cm～3.7cm (平均2.6cm)、底径が2.8cm～3.6cm (平均3.2cm)、器体内底面から脚下端までの高さが5.7cm～8.7cm (平均6.7cm)である。ⅡF17rと18s間には、幅の広い落ち込み(攪乱)があるものの⑩黒褐色砂層の上に⑪の間層が覆い、その上に、⑬黒褐色砂層が堆積しており、同時期における形態差ではないようである。18s出土の160は、小形で下端を指先で摘んでいる。これらは1類のうちで、脚台下端面を主に平坦に作り出すA類の脚台の高い1A2類に属するものである。

2類の169・170は17rからの出土で、先端を押し付けて平坦に作り出している。171～173は18sからの出土である。これらの1類の廃棄層においても、2類が同時に混在している。これらは1類のうちで、脚台下端面を主に平坦に作り出すA類の脚台の高い1A2類に属するものである。口縁部153～155は17r層出土のもので、外面には成形時の粘土紐の跡が残されたままであるが、内面は丁寧にヘラ削りとナデ調整が加えられている。

トレンチ6・7の北西端(ⅢF81・8m・91・9m・101・10m)の下層⑩暗灰黄色砂層・⑪黒色砂層からまとまって出土(174～187)している。脚台の量法は、器体と接する脚の径が2.5cm～3.4cm (平均3.0cm)、底径が3.2cm～4.2cm (平均3.7cm)、器体内底面から脚下端までの高さが6.5cm～8.3cm (平均7.2cm)である。1A2類に属するものである。このほか、184～186は1A類より大形で、脚台下端を指先で摘んだままの1B類に属するものであるが混在する。また、さきのトレンチのまとまりと同じように2類・187が伴出する。

このほか、出土地点は散在するが、大形で脚台下端を指先で摘んだままの1C類が出土している(188～190)。188は未使用のもので、器体の口径は、18.5cmほどである。

・知多式3類(191～199)

器体に握りはなしのままの棒状脚をつける3類は、まとまって出土する地点はなかった。トレンチ6・7の北西端あたりに散在している。191の器体口径は18cmを計る。192・199は細身のタイプである。

・知多式4類(200～221)

器体に先端が尖った細い棒脚をつける4類は調査区のはほぼ全域に分布するが、明確な廃棄層としては、トレンチ2のⅡF17o・p・qの⑧茶褐色砂層(暗灰

褐色粘質砂)、⑩黒褐色砂層(灰褐色粘質砂)、トレンチ3のⅢF1n・o、トレンチ4のⅢF2n・oの⑫黒褐色砂(黒色砂)、⑬混貝黒褐色砂層がある。

トレンチ2の遺物については、下層の⑩黒褐色砂層(灰褐色粘質砂)出土脚の平均量法が、器体と接する脚の径が2.0cm、器体内底面から脚下端までの高さが8.7cmで、これらは、4類のうちで最も長いA1類に属する。その上層の⑧茶褐色砂層(暗灰褐色粘質砂)出土脚の平均量法は、器体と接する脚の径が1.9cm、器体内底面から脚下端までの高さが8.0cmで、A1類よりやや短いA2類に属する。

トレンチ3の遺物については、⑫黒褐色砂層のものの平均量法が、器体と接する脚の径が1.7cm、器体内底面から脚下端までの高さが7.6cmで、これらは、A2類に属する。⑧層の上層にあたる混貝黒褐色砂層のものは、器体と接する脚の径が1.6cm、器体内底面から脚下端までの高さが6.8cmで、4A類では最も短いA3類に属する。

このほか、4類で最も大形の4C類に属するもの(220・221)が、トレンチ1・4で数点出土している。

・知多式5類(222～228)

器体の底部が横にのびてゆるやかに立ち上がる浅鉢形をなし、脚は3類と同様に握りはなしのままの太くて短い乱雑な作りの5類は、トレンチ1の⑭暗灰褐色粘質砂層からまとまって出土している。

注

- 1 東海市教育委員会1999年「愛知県東海市上浜田遺跡発掘調査報告」
- 2 知多式製土器の形式分類については、次の文献による。立松彰1994年「愛知県」近藤義郎編「日本土器製法研究」青木書店 426p. -429p.

(5) その他(図版8・10)

81は片口鉢で、トレンチ5からの出土である。口径は18cmで、胎土・焼成から常滑窯産陶器とは異なり、時期・産地とも不明である。82はトレンチ3から出土した常滑窯産陶器の皿で、口径8cm、器高2.4cm、底径4cmである。常滑窯編年の3型式期に位置づけられよう。

移動式カマド109は、トレンチ4から出土した、破片資料で、大きさ等の詳細は不明だが焚き口の一部と思われる(注)。

110～133は土鐘で、110～112・122・123・126・127はトレンチ5ⅢF6・7n・7o・7p区にかけて面的

に広がる灰褐色粘土層直上層（褐色砂層）から、黒径90号窯期の灰釉陶器皿（図版8-70）とともにままと出土している。図化していない同層から出土した土鍾の大半は110～112と同じ形態のものであり、計28点出土している。

今回の調査で出土した土鍾は、完形品及び破片を含め84点あり、代表的なもののみ図示した。

118・123・125が須恵質以外はすべて土師質のものである。

紡錘型のもは、長さが5～6cmほどのもの（110～113）、4～5cmほどのもの（118～121）、4cm未満のもの（126）がある。管状のもは、長さが6cm前後のもの（114～117・122）、4～5cmほどのもの（123～125・127～129）がある。球状のもは、胴径が5cmほどのもの（130）、4cm前後のもの（131～132）がある。

この他、不明の土製品106がトレンチ3から1点出土している。ヘラ削りで平坦面をつくり、断面は楕円形を呈する。先端は欠いている。

注 森泰通氏（豊田市教育委員会）から、東海市教育委員会実施1976年調査の未報告資料の中に移動式カマド破片が含まれているとの指摘を受けている。

2 石製品（図版13-236～240）

今回の調査で出土した石製品としては、砥石が5点ある。237・238はトレンチ3、240はトレンチ4、235・239はトレンチ5から出土している。236は凝灰岩で、すべての面を使用している。また、細い線条痕が両面に残る。237は砂岩で使用面は4面、238は砂岩で使用面は1面、239は凝灰岩で使用面は5面、240は凝灰質泥岩で使用面は4面ある。

3 その他の遺物【金属器・紡錘車・骨角器・自然遺物】（図版13-229～235・図版15・巻頭カラー）

金属器229は鉄製U字形鎌鋤先である。トレンチ5ⅢF7q区の混貝黒褐色砂層から須恵器提瓶（図版7-35）、土師器甕（図版9-85）、知多式製塩土器3類とともにままと出土している。刃幅は16.5cmで、断面はV字形を呈する。

銭貨として萬年通宝が、トレンチ4ⅢF4oの混貝黒褐色砂層（黒褐色砂）から出土している。この層には、知多式製塩土器4類が混在している。萬年通宝は、天平宝字4年（760年）に発行されたという。

230はトレンチ7から出土した、棒状のもので先

を欠く。断面は図上左側が円形、右側が方形で、右に向かつて厚みが薄くなる。鎌の一部と考えられる。

231はトレンチ6から出土した、滑石製の紡錘車で断面台形を呈する。上底径2.4cm、下底径3.8cm、高さ1.8cmで、中央に径6mmの穿孔がなされる。下底面には中央に2条、外側に1条の同心円の線刻がある。斜面には上部に2条、下部に1条の線刻があり、間に鋸歯文様の線刻を施す。なお、表面が磨耗しているため、図上の鋸歯文については一部復元している。

232～235は骨角器である。232はトレンチ7から出土している。シカ・イノシシ等の手・中足骨を使用した鎌で、柄の先を欠く。233はトレンチ6からの出土で、魚骨を使用した垂飾と思われる。側面には加工痕があるが穿孔等はない。234はトレンチ3からの出土で、鹿角を使用した縫い針と思われる。先端を欠くが、長さ15cmに復元できる。上部側面から上底への穿孔がある。235はトレンチ4からの出土で、シカ・イノシシ等の手・中足骨を使用したヘラ状のもので、長さ15cmを測る。

この他、自然遺物として、貝層中等から貝類、獣骨類が出土している。

貝層中の貝類は、ブロックサンプリングをおこなっており、付表にまとめている。

獣骨類（写真図版15）については、ウシ・ウマ・イノシシ・イヌ等のほか、タイ類等の魚骨、陸カメの甲羅等が出土している。

第3章 まとめ

松崎遺跡の地形と広がり (図版1～5参照)

昭和51年度に東海市教育委員会が発掘調査を実施した電車線路沿いの南北に伸びる箇所(I～IV・注1)と国道247号線が東西に伸びる箇所(V～VII・注2)及び昭和63年度に財団法人愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した国道247号線が南北に伸びる箇所(北、南地区・注3)の調査結果も踏まえて遺跡の地形と広がりについてみる。

まず地形であるが、本遺跡は伊勢湾に面する海岸平地の最も海よりに形成された砂堆上(微高地)に立地する。この砂堆列は、本遺跡から南へ、断続しながらも海岸に沿って5kmほど続いている。その砂堆を、詳細に見ると、本遺跡の立地する砂堆は、最も北に位置し、南北の長さが、およそ1km、東西の幅は推定で最大300mほどのまとまりをもつものようである。周辺地形を現状の標高から推定した結果、砂堆を開析する数条の浅谷が存在するようである(注4)。

遺跡が立地する周囲の現況地形を見ると、砂堆の高いところと低いところでは、約2mほどの比高差が認められ、ちょうど、線路をはさんで、旧海岸寄りの西側が低くなっている。発掘調査した区域での遺跡の基盤面を見ると、I区～IV区が標高2.2m前後、北地区北端が、2.2mほど、南地区南端が1.2mほど、V区東端が1.0mほどである。遺物包含層の広がりとしては、南地区では、北地区に比べ1.5mほど低くなった標高1.5mの基盤面で遺構が確認されており、遺物包含層は、さらに南に向かって低くなった標高1.2mほどのところ(南地区の下から二つ目の調査区あたり)で途切れる。今回調査したトレンチ8では、1.6mあたりで湧水があり、それより下層は確認できていないが、標高2.2mの旧水出面(図版5③暗青灰色砂層)の下は無遺物である。V区東端は、基盤面が1.0mほどであるが、その上に60cmほどの遺物包含層が堆積し、古墳～奈良時代の須恵器、土師器が出土する。遺物は完器のものもあり、遺構が存在する可能性も高い。

遺跡の立地する砂堆は、東と西で大きな高低差があり、北地区の中ほどからトレンチ3のⅢG3aを経てトレンチ5の7s・8sに至る線を境として、その東側は、急斜面となっておよそ1.5mほど低くなっている。この高低の境界は、北北東から南南西を軸としており、砂堆の伸びる方向と同じである。低くなった東側、すなわち、砂堆の内陸地側の縁辺にお

いても、南地区の北半区域の標高約1.4mの基盤面から炉状の遺構が6基検出されている。

今回調査のトレンチ3の東端最下層とみられる②暗灰褐色砂層は、わずかではあるが、古墳～奈良時代の須恵器・土師器片を包含する。また、トレンチ5のⅢG8a区域の暗灰(濁)色砂層もほんのわずかではあるが、遺物を包含する。これらの層は、埋蔵文化財センター調査の基盤上に堆積する第Ⅶ層＝黒褐色細砂層(古墳～平安時代の遺物包含層)に対応するものとみられる。

次に、製塩土器廃棄層の分布から、砂堆の旧地形と遺跡の広がりをみていく。製塩土器で最も古い筒形の脚台を付けた1類の堆積層をみていくと、トレンチ2の東端で標高1.9m、トレンチ3のⅢF2oで標高2.4m、トレンチ5の西端で標高1.8m、トレンチ6の北端で標高1.8mの面に堆積しており、土器製塩が営まはれはじめた時期(5世紀)の砂堆の状態を示している。すなわち、この時期には、前述したような砂堆の高低差はなかったようである。

その後、トレンチ3の西端側でみると、1類出土の⑩黒色砂層の上に無遺物の⑦、⑧の黄褐色砂層、⑨暗黄褐色砂層が80cmほど堆積(自然堆積)しており、これらは、海岸べりの砂が、台風などの大きな波浪によって打ち上げられて堆積したものと考えられる。この堆積層の上に、7世紀後半代に使用され始めた4類の廃棄層が堆積しており、トレンチ2あたりでは、4類の廃棄層が90cm以上もあり、4類時期の土器製塩作業によって盛り上がってきていることがわかる。さらに、トレンチ2の西端側の⑤黄褐色砂層に見られるように、また、自然堆積があって、その上で、5類の9世紀後半代の時期の土器製塩が行われている。このように、土器製塩作業と自然堆積によって、砂堆の高まりが形成されていったことがわかる。

次に、海岸線であるが、北地区に分布する4類の製塩土器堆積群、線路沿いのI区からIV区における製塩土器の出土状況、同じく小貝塚(貝の捨て場)の分布状態を追ってみると、51年度調査のI～IV区域に沿っている。土器製塩が、海水を使う作業であったことを考えると、製塩土器の廃棄場所も、海岸線に近いところであったと考えられるので、ちょうど、線路あたりに満潮時の汀線を想定できる。

土器製塩の時期

本遺跡では、51年度調査において紀淡海峡地帯の

土器製塩先進地域の脚台Ⅱ式（注5）に類似する体部が斜め上方にまっすぐ伸びるV字形の器体をもつ「松崎類」が出土しており、知多地方における土器製塩の開始を考えるうえで貴重な資料を提供している。今回の調査において、知多式製塩土器1類の廃棄層を確認し、その広がり的一端をとらえることができた。その廃棄層から2類が伴出しており、形態から分類して固有の使用時期もあったのではないかと考えられてきた2類が、1類と同時期に使用されていたことを追認することができた。3類は、今回の調査では、その廃棄層を確認することはできなかったが、Ⅱ区の南側に存在している。トレンチ5のU字形鉄鍬先（実測図229）と提瓶（実測図35）と3類が伴出して出土しており、その使用時期の一端がH（東山）-50（7世紀中葉）期にあったことが明らかになった。4類については、トレンチ2・3・4においても廃棄層が分布することが明らかになった。5類は、51年度調査において、9世紀後半代においても土器製塩が行われていたことを明らかにしたものであるが、トレンチ1において、Ⅳ区から、さらに北へ広がっていることがわかった。

本遺跡は、このように知多式製塩土器の全使用時期を明確にすることができる貴重な地域である。

土器製塩の営み

土器製塩に伴う諸施設については、遺構で触れたように、住居に伴うかまどではないかとみられる粘土塊が何箇所か認められた。それらの塊は、表面を出しただけで留め、それ以上、手を触れなかったもので、詳細は定かではないが、これまでの調査成果からみて、かまどないしは炉状遺構とみなすことができる。

トレンチ6の南側は、51年度調査区域と重複するが、改めて精査した結果、柱穴とみられるピットを検出した。28年前の51年度調査では、住居跡として把握できず、土器製塩に伴う炉址として報告したのであるが、それらは、住居に伴うかまどであった可能性も出てきた。63年度の調査においても、炉状遺構が数基検出されているが、住居に伴うかまどの可能性も指摘されているものもある。砂上における遺構は、壊れやすいこともあって、遺構検出に難儀であるが、今後の調査の要注点である。

いずれにせよ、当地方における土器製塩の諸施設については、まだまだ不明確なことが多い。

松崎遺跡保護の今後の方向

知多半島には、60箇所以上の製塩遺跡が知られているが、そのほとんどが、住宅や護岸堤防などによ

って実際に見ることができない。いまわずかに、本遺跡と知多市の日長崎海底遺跡、南知多町の石畑遺跡・矢梨遺跡でしか製塩土器の散布を見ることができない。これらの遺跡も、本遺跡を除くと、住宅地の中にあたり、土盛りによって埋め立てられたりしてきており、散布状態をみることができなくなりつつある。土器製塩遺跡は、古代知多半島の営みをとらえる上で、重要な遺跡であり、本遺跡を史跡として保護していく必要がある。

注

- 1 東海市教育委員会 1977 『愛知県東海市松崎貝塚発掘調査報告』
- 2 東海市教育委員会 1984 『愛知県東海市松崎貝塚第2次発掘調査報告書』
- 3 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991 『松崎遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第20集
- 4 鬼頭剛（愛知県埋蔵文化財センター）氏の御教示による。
- 5 広瀬和雄 1994 「大阪府」 近畿農産部編『日本土器製塩研究』青木書店

謝 辞

・発掘調査にあたっては、地主の神野博孝、佐治裕、蟹江齊、井上あき江、大村芳樹の各氏に、お世話になりました。

・発掘調査作業については、(株)オームラ組と東海市シルバー人材センターの天草国夫、小沢実雄、片山重雄、小池善次郎、山盛愛子、中村勇夫、神野満喜夫、椎葉慎治、山盛正、加藤幸枝の各氏に従事していただきました。

・本報告書を作成するにあたり、整理作業に、井上由子、鴻巣 彩、藤井恵美子の各氏に従事していただきました。

・発掘調査中に、文化庁記念物課の齋田佳男、愛知県教育委員会文化財保護室の蟹江吉弘の両氏に、現地で、種々御教示をいただきました。

・遺物の詳細については、主に土師器について永井宏幸、須臾器について城ヶ谷和広、石製品の花材及び獣骨類について堀木真美子の各氏に、御教示をいただきました。

・その他、本報告書を作成するにあたり、福岡晃彦、鬼頭剛、川添和暁、早野浩二、原田幹、森泰通、磯部利彦、楠美代子の各氏に、種々御教示をいただきました。

文末になりましたが、記して厚くお礼申し上げます。

付表 貝類組成表

種名	番号	A		B		C		D		E		F-1	
		個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
斧足網	ハマグリ	338	92.35	0	0	55	59.14	4	6.90	47	58.75	276	65.25
	シオフキ	12	3.28	6	2.44	1	1.08	2	3.45	0	0	12	2.84
	マガキ	2	0.55	45	18.29	0	0	0	0	16	20.00	43	10.17
	シジミ	0	0	0	0	1	1.08	1	1.72	6	7.50	0	0
	アサリ	0	0	1	0.41	0	0	0	0	0	0	0	0
	オオノガイ	0	0	2	0.81	0	0	0	0	0	0	3	0.71
	サルボウ	2	0.55	0	0	2	2.15	11	18.97	0	0	1	0.24
	カガミガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	354	96.72	54	21.95	59	63.44	18	31.03	69	86.25	335	79.20
	腹足網	ウミミナ類	7	1.91	11	4.47	29	31.18	36	62.07	6	7.50	75
ヘナタリ		0	0	0	0	1	1.08	0	0	2	2.50	0	0
ムシロガイ		0	0	4	1.63	2	2.15	2	3.45	1	1.25	1	0.24
ギボシナガニシ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.24
マルテンスマツムシ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タマキビ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.24
アカニシ		3	0.82	0	0	2	2.15	0	0	0	0	9	2.13
キサゴ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ツメタガイ		2	0.55	18	7.32	0	0	2	3.45	2	2.50	1	0.24
タニシ類(陸産)		0	0	159	64.63	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	12	3.28	192	78.05	34	36.56	40	68.97	11	13.75	88	20.80	
計	366	100	246	100	93	100	58	100	80	100	423	100	

微小貝=腹足網・陸産

マイマイ科	0	0	2	100	3	75.00	1	100	1	50.00	4	100
キセルガイ科	0	0	0	0	1	25.00	0	0	1	50.00	0	0
計	0	100	2	100	4	100	1	100	2	100	4	100

種名	番号	F-2		F-3		G		H-1		H-2		H-3	
		個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
斧足網	ハマグリ	6	42.86	5	21.74	378	98.95	24	47.06	11	44.00	11	37.93
	シオフキ	1	7.14	0	0	2	0.52	1	1.96	0	0	2	6.90
	マガキ	0	0	0	0	0	0	7	13.73	3	12.00	2	6.90
	シジミ	1	7.14	2	8.70	0	0	1	1.96	1	4.00	1	3.45
	アサリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	オオノガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	サルボウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3.45
	カガミガイ	0	0	3	13.04	0	0	1	1.96	0	0	0	0
	小計	8	57.14	10	43.48	380	99.48	34	66.67	15	60.00	17	58.62
	腹足網	ウミミナ類	5	35.71	8	34.78	2	0.52	14	27.45	8	32.00	10
ヘナタリ		0	0	1	4.35	0	0	2	3.92	2	8.00	2	6.90
ムシロガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ギボシナガニシ		0	0	1	4.35	0	0	0	0	0	0	0	
マルテンスマツムシ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
タマキビ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
アカニシ		1	7.14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
キサゴ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ツメタガイ		0	0	3	13.04	0	0	1	1.96	0	0	0	0
タニシ類(陸産)		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計	6	42.86	13	56.52	2	0.52	17	33.33	10	40.00	12	41.38	
計	14	100	23	100	382	100	51	100	25	100	29	100	

微小貝=腹足網・陸産

マイマイ科	0	0	0	0	1	25.00	0	0	1	50.00	1	50.00
キセルガイ科	0	0	1	100	3	75.00	0	0	1	50.00	1	50.00
計	0	100	1	100	4	100	0	100	2	100	2	100

※貝層のサンプルは幅20cm×奥行20cm×厚さ10cmを1ブロックとしたが、トレンチ4のサンプルHのみ奥行10cm。

種名	番号	H-4		H-5		H-6		I-1		I-2		J-1	
		個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
斧足網	ハマグリ	23	60.53	13	52.00	3	20.00	104	53.61	70	34.65	47	20.26
	シオフキ	1	2.63	2	8.00	1	6.67	20	10.31	24	11.88	7	3.02
	マガキ	10	26.32	7	28.00	7	46.67	0	0	4	1.98	80	34.48
	シジミ	0	0	1	4.00	0	0	0	0	2	0.99	0	0
	アサリ	0	0	0	0	0	0	13	6.70	13	6.44	0	0
	オオノガイ	1	2.63	0	0	0	0	1	0.52	0	0	2	0.88
	サルボウ	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1.49	2	0.88
	カガミガイ	1	2.63	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.43
	小計	36	94.74	23	92.00	11	73.33	138	71.13	116	57.43	139	59.91
	腹足網	ウミナナ類	0	0	2	8.00	2	13.33	46	23.71	56	27.72	47
ヘナタリ		0	0	0	0	2	13.33	6	3.09	13	6.44	20	8.62
ムシロガイ		1	2.63	0	0	0	0	3	1.55	3	1.49	1	0.43
ギボシナガニシ		0	0	0	0	0	0	1	0.52	0	0	0	0
マルテンスマツムシ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タマキビ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アカニシ		1	2.63	0	0	0	0	0	0	9	4.46	24	10.34
キサゴ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ツメタガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	5	2.48	1	0.43
タニシ類(陸産)		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	2	5.26	2	8.00	4	26.67	56	28.87	86	42.57	93	40.09	
計	38	100	25	100	15	100	194	100	202	100	232	100	

微小貝＝腹足網・陸産

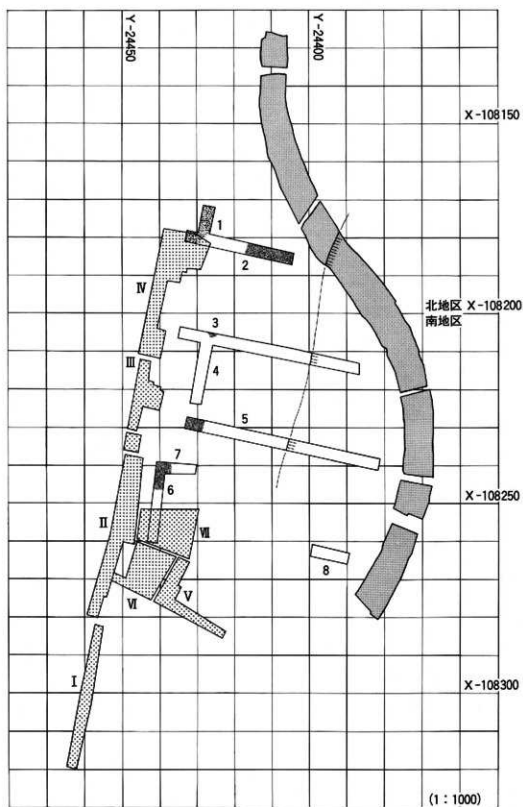
マイマイ科	2	40.00	1	11.11	0	0	1	7.14	0	0	0	0
キセルガイ科	3	60.00	8	88.89	0	0	13	92.86	0	0	8	100
計	5	100	9	100	0	100	14	100	0	100	8	100

種名	番号	J-2		K-1		K-2		K-3		K-4	
		個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
斧足網	ハマグリ	10	14.08	26	30.59	64	53.78	53	28.65	62	27.93
	シオフキ	0	0	3	3.53	1	0.84	2	1.08	6	2.70
	マガキ	46	64.79	5	5.88	6	5.04	11	5.95	18	8.11
	シジミ	0	0	6	7.06	0	0	2	1.08	0	0
	アサリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	オオノガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	サルボウ	0	0	3	3.53	1	0.84	2	1.08	1	0.45
	カガミガイ	1	1.41	0	0	1	0.84	0	0	2	0.90
	小計	57	80.28	43	50.59	73	61.34	70	37.84	89	40.09
	腹足網	ウミナナ類	10	14.08	33	38.82	31	26.05	57	30.81	76
ヘナタリ		4	5.63	8	9.41	14	11.76	53	28.65	53	23.87
ムシロガイ		0	0	1	1.18	0	0	3	1.62	0	0
ギボシナガニシ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
マルテンスマツムシ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タマキビ		0	0	0	0	0	0	1	0.54	2	0.90
アカニシ		0	0	0	0	1	0.84	0	0	1	0.45
キサゴ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ツメタガイ		0	0	0	0	0	0	1	0.54	1	0.45
タニシ類(陸産)		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	14	19.72	42	49.41	46	38.66	115	62.16	133	59.91	
計	71	100	85	100	119	100	185	100	222	100	

微小貝＝腹足網・陸産

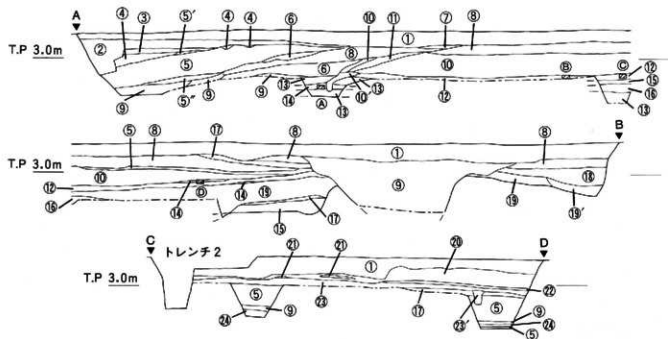
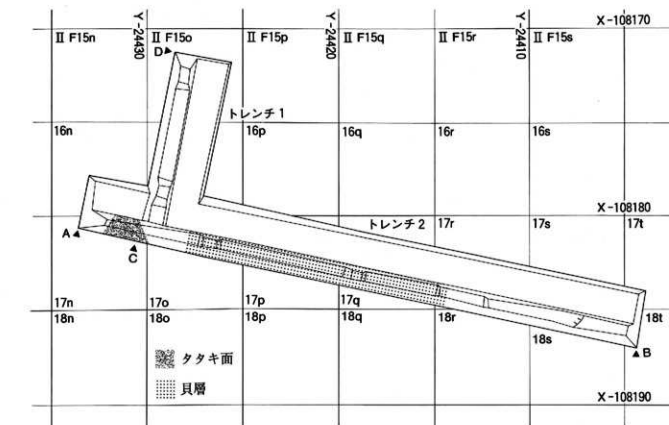
マイマイ科	0	0	0	0	0	0	0	0	1	50.00
キセルガイ科	2	100	11	100	4	100	12	100	1	50.00
計	2	100	11	100	4	100	12	100	2	100

図版1 調査区位置図



- 昭和51年度(1976)調査区
 - 昭和63年度(1988・89)調査区
 - 平成16年度(2004)調査区
 - 製塩土器廃棄層・1類
- 製塩土器廃棄層・5類

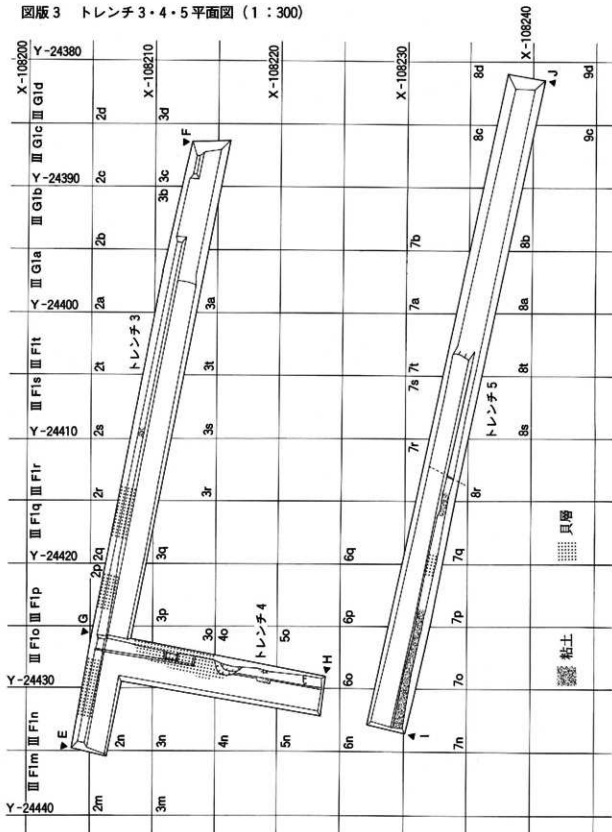
図版2 トレンチ1・2平面図(1:200)・断面図(1:100)



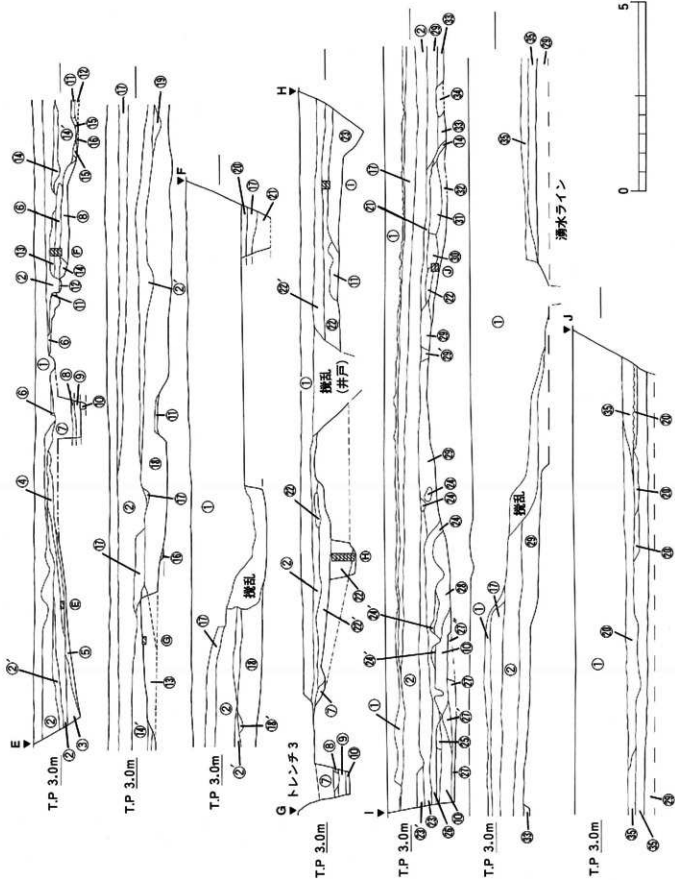
トレンチ1・2層序

- ①表土層②1976年調査時埋土③灰層④黒褐色砂質土層(5類出土)⑤黄褐色砂層(無遺物)⑤'黒褐色砂ブロック含
 ⑤"茶褐色砂混入⑥暗灰褐色砂礫層⑦黒褐色砂層(攪乱?)⑧茶褐色砂層(4類,炭化物,灰多量含)
 ⑨暗褐色砂層(4類,炭化物少量含)⑩黒褐色砂層(4類,炭化物多量含)⑪黄褐色砂ブロック含⑫暗灰色礫層
 ⑬混貝暗灰褐色砂層⑭暗灰褐色砂層⑮貝層⑯黒褐色砂層(1類,炭化物多量含)⑰暗灰色砂層⑱暗黄褐色砂層(炭化物少量含)
 ⑲暗茶褐色砂層(遺物少)⑳黒色砂層(1類,炭化物多量含)㉑'灰混入⑳暗灰褐色粘質砂層(5類,灰,炭化物を多量含)
 ㉒'灰色粘土層㉓混貝暗褐色砂層㉔混貝暗黄褐色砂層㉕'暗め㉖暗褐色粗砂層

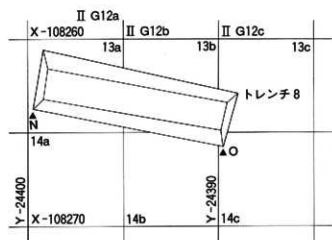
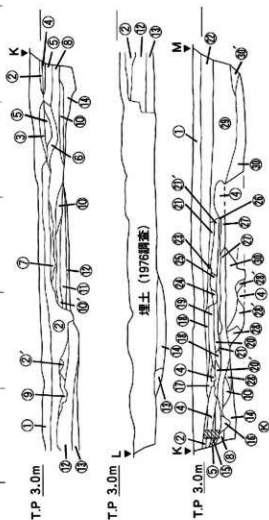
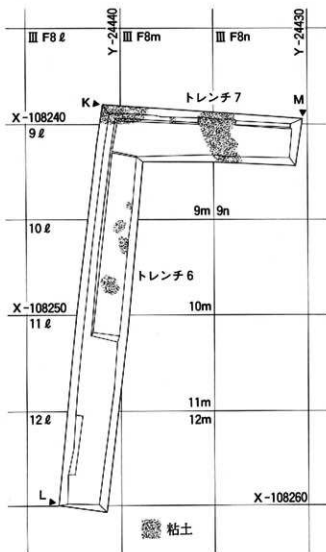
図版3 トレンチ3・4・5平面図 (1:300)



図版4 トレンチ3・4・5断面図 (1:100)

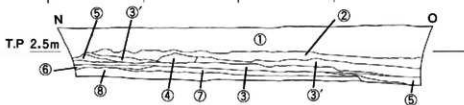


図版5 トレンチ6・7・8平面図(1:200)・断面図(1:100)

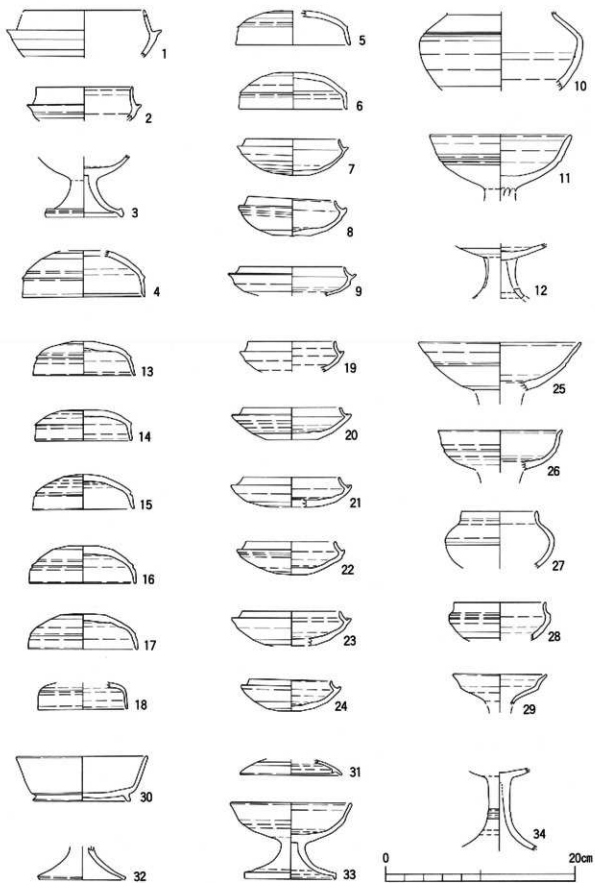


トレンチ8層序

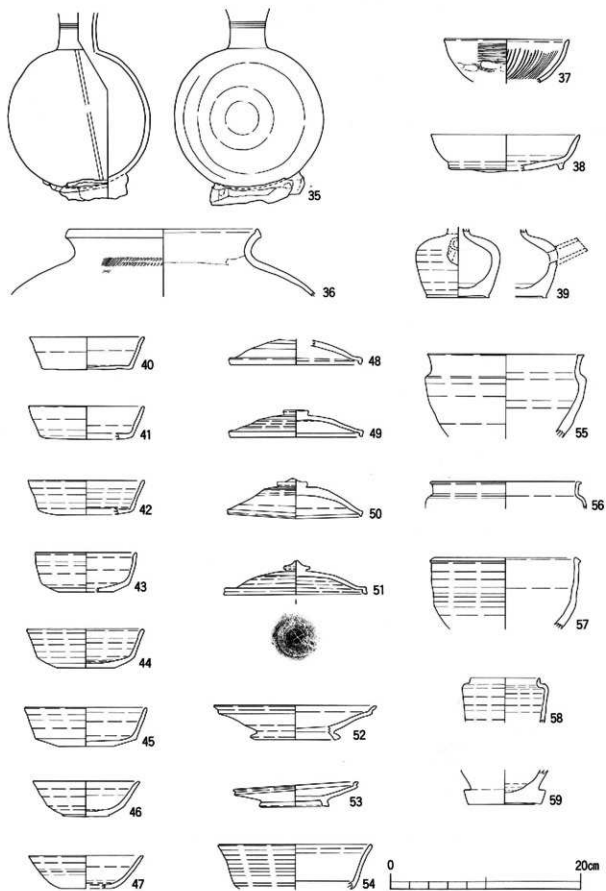
- ①表土層②青灰色粘土層③暗青灰色砂層 (木田)
- ③'硬質④暗灰黄色砂層 (青灰色粘土混入)
- ⑤青灰色砂層⑥灰褐色砂層⑦灰黄色砂層
- ⑧明茶褐色粗砂層



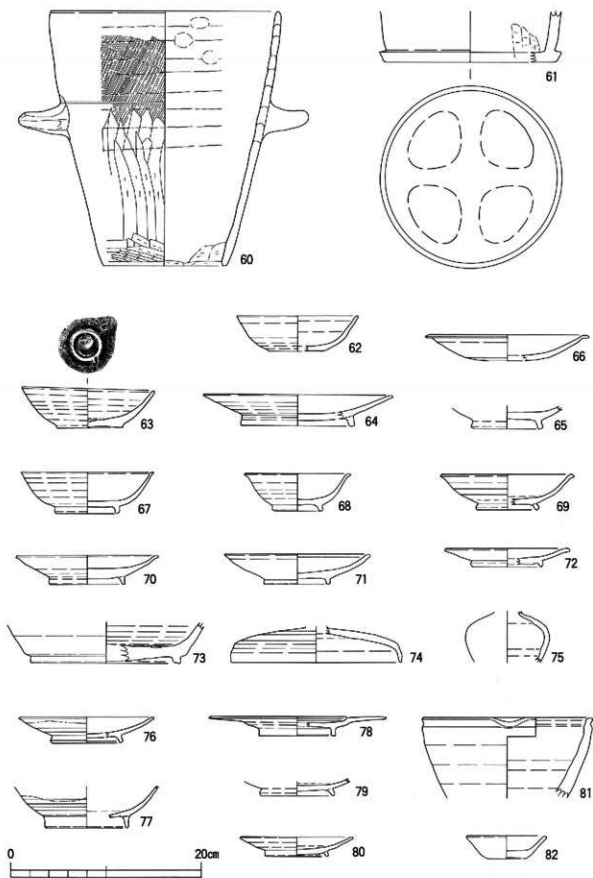
图版 6 须惠器实测图 1



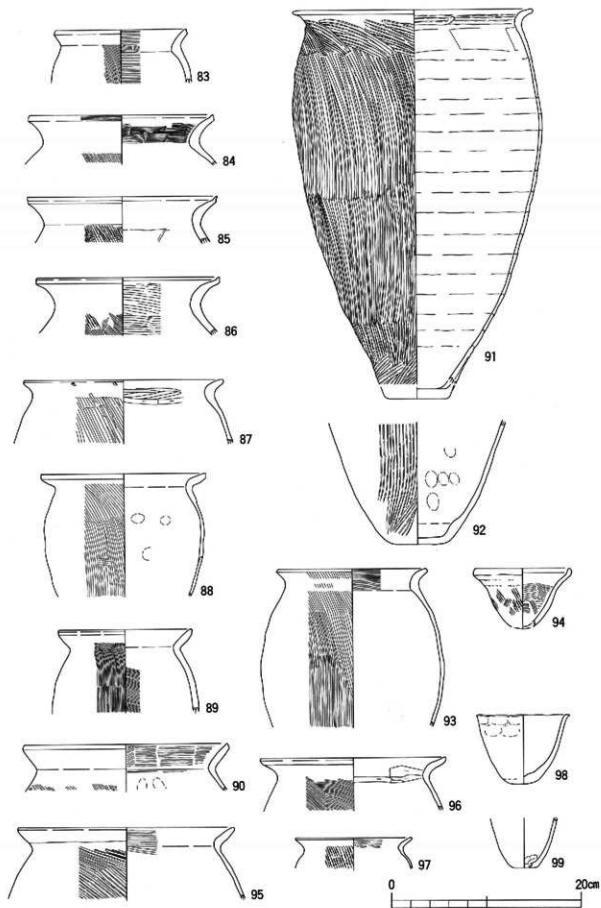
图版 7 须惠器实测图 2



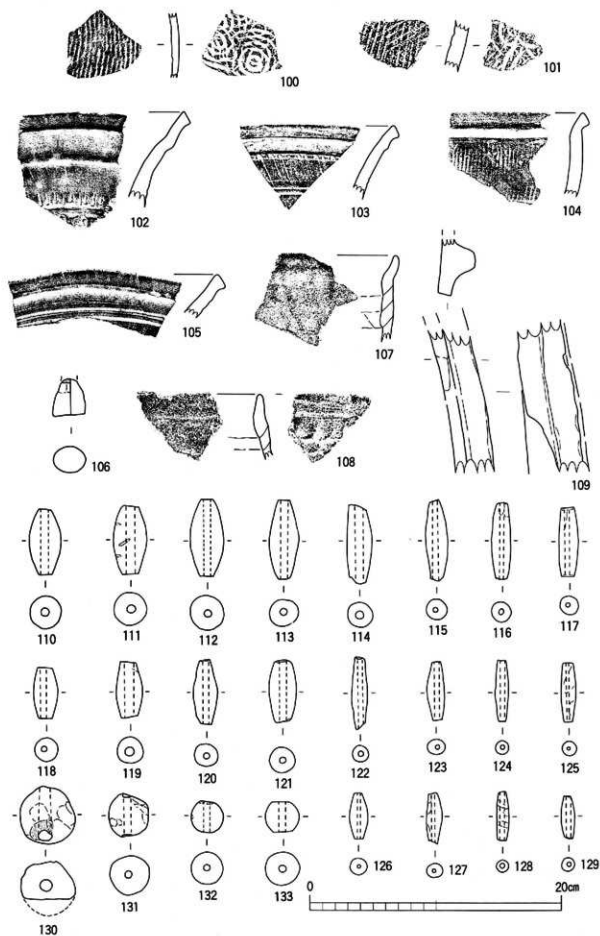
图版 8 須惠器・灰釉陶器・中世陶器実測図



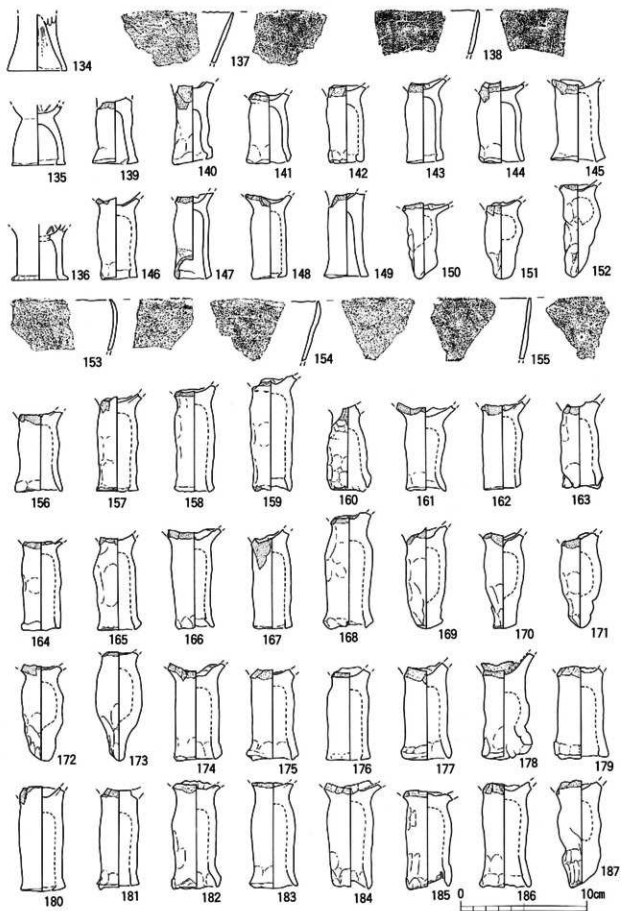
图版 9 土師器実測図



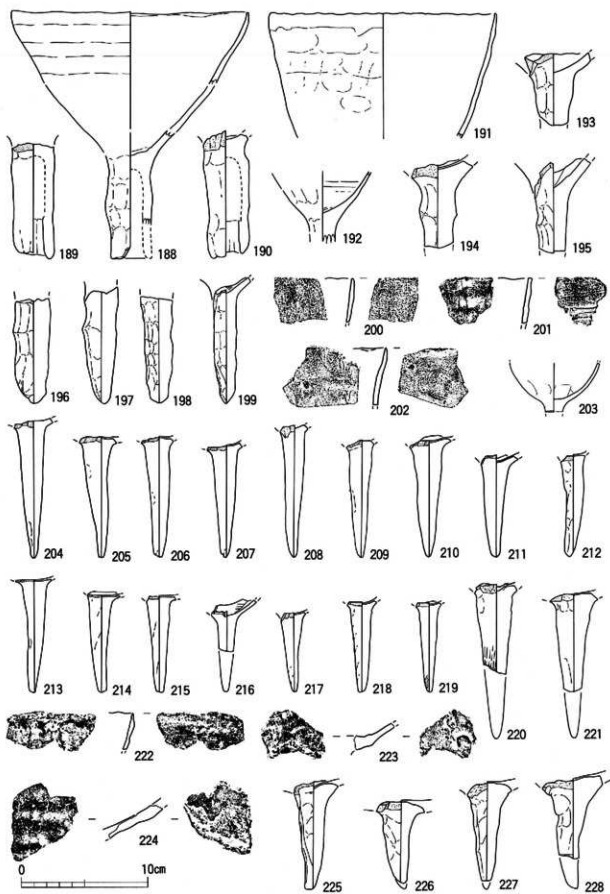
図版10 須恵器・土師器・土製品・土錘実測・拓影図



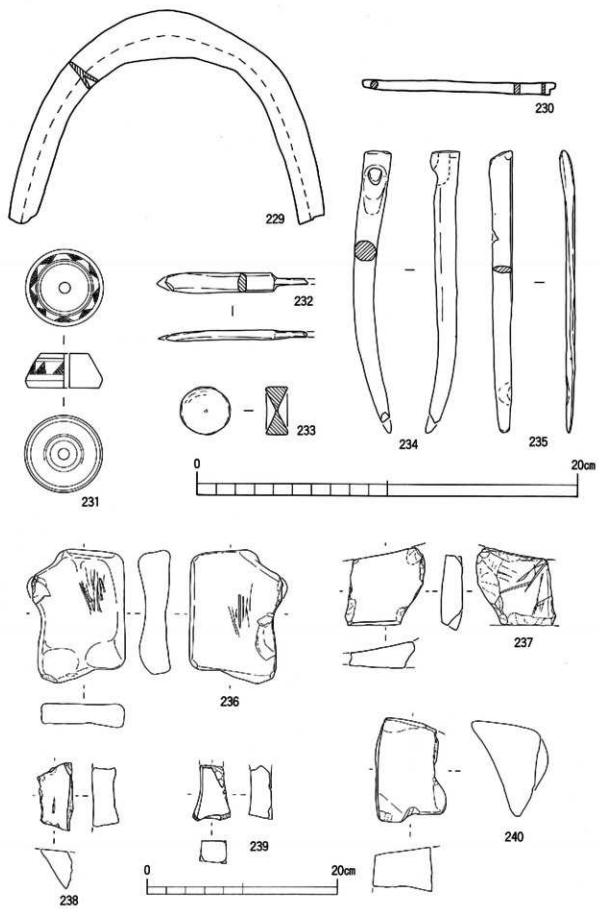
图版11 製塩土器実測測・拓影图1



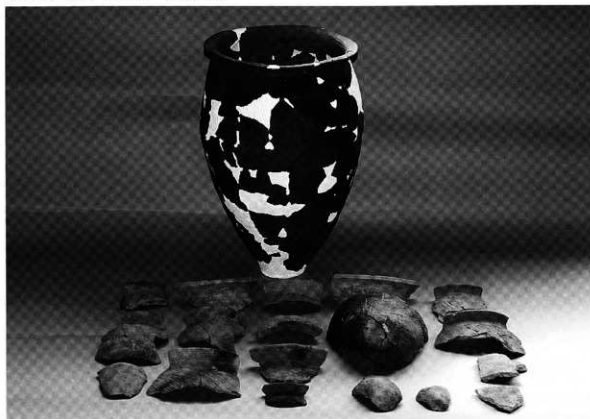
图版12 製塩土器実測測・拓影图2



图版13 金属器·骨角器·石器实测图



図版 14 遺物 (土師器・須恵器等)

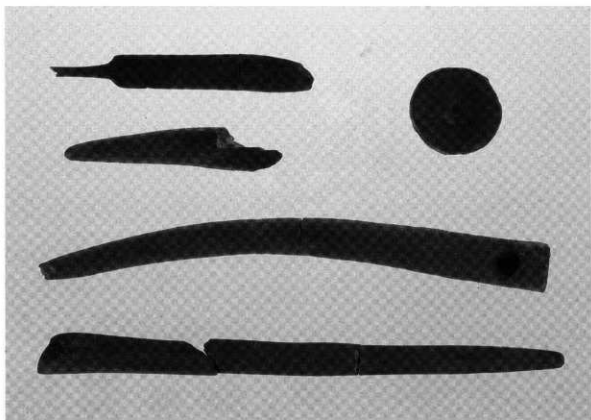


土師器

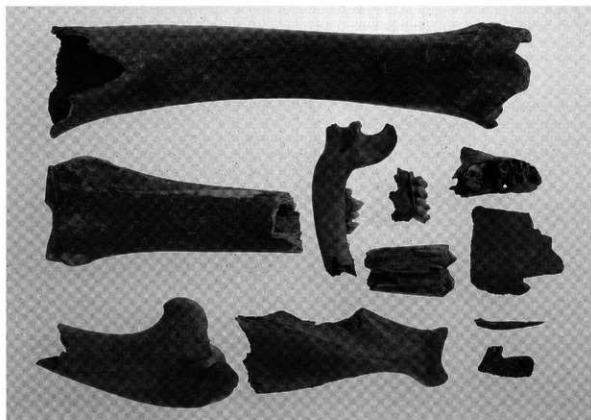


須恵器等

図版 15 遺物 (骨角器・獣骨類)



骨角器



獣骨類

報告書抄録

ふりがな	あいちけん とうかいし まつさきいせき かくにんちょうさほうこく							
書名	愛知県東海市松崎遺跡確認調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	立松 彰・永井 申明							
編集機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 TEL052-603-2211							
発行年月日	西暦 2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつさき 松崎貝塚 (遺跡)	とうかいし 東海市 おほの 大田町 まつさき 松崎	23222	43037	35度 1分 38秒	136度 53分 46秒	2004.10.01 ～ 2004.12.07	400m ²	保存目的 の内容確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
まつさき 松崎貝塚 (遺跡)	製塩遺跡	古墳～平安		製塩跡 製塩土器廃棄層 貝層		製塩土器 滑石製紡錘車 鉄製U字形鎌先 骨角器 萬年通宝 須臾器・土師器		

**愛知県東海市
松崎遺跡確認調査報告**

2005年（平成17年）3月31日

編集・発行 愛知県東海市教育委員会

印刷 株式会社 紙鉄印刷所

